

2. 伝統的な暮らし

川で食べ物をとる

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や
川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、
そして未来へ

用語

さくいん



川では魚だけでなくワシりょうもおこなわれた。丸木に生きた魚を結びつけておき、エサをとりに来たワシをつかまえる。(『蝦夷島奇観』より 帯広百年記念館蔵：2)

伝統的なアイヌ文化では、ヒエやアワなどの畑も作られていましたが、基本的には自然の中で、植物採集・魚とり・狩りなどをすることによって食べ物を得ていました。

内陸に住む人たちにとって、飲み水が手に入り、魚(チェフ)がとれる川は、とても大切なところでした。

秋、海から産卵のためにのぼってくるサケ(カムイチェフ)やアメマス(ツクツクシシ)、春に下流から上流へやってくるイトウ(チライ)、そのほかヤマメ(イコイチャンコロチェフポ)やウグイ(オツワッキ)、そして今では見られなくなったチョウザメ(ユベ)(p 93)など、豊かな川は命を支えてくれたのです。

そのため、アイヌの人たちにとって、川は「カムイ(神)(p 134)」でした。



マレクによる漁。子どもがたいまつをかざしている。

(平澤屏山『蝦夷人マレップにて鮭を捕る図』〔3〕 函館市中央図書館蔵) マレク。(帯広百年記念館)

「マレク」モリとカギを合わせたすぐれもの

サケやマスをとる道具に「マレク」というものがあります。20cmくらいのカギ(大きな釣り針のようなもの)を、ひもなどで台木に取りつけたものです。

このマレクを2~3mほどの柄の先に取りつけます。

使い方はモリといっしょで、泳ぐ魚に向かってつきさします。すると、カギが台木からはずれて、魚はひもでぶら



下がります。魚の重みでカギが上向きにくいこむので、あばれてもはずれません。(p 120)

「矢」で小魚をとる

「ペラアイ」という矢を使って小さめの魚をとることもありました。

ただし、ペラアイにはつきささる「ヤジリ」ではなく、平たい木の板のようなものがつけられています。

水中の魚に向かって小型の弓で射て、命中すると魚がうかんでくるのです。



ペラアイ。右の板の部分が前で、魚に当てるところ。(帯広百年記念館)

1 産卵(さんらん): こういう場合は、メスが卵を産むことと、オスが卵に放精(ほうせい): 精子をかけること)を合わせていっている。

2 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155

- 24 - 5352 月曜日休館

3 平澤屏山(ひらさわびょうざん: 1822 ~ 76): 幕末の画家。十勝・日高地方に滞在し、アイヌ民族の暮らしに直接ふれて絵を描いたといわれる。「マレップ(マレフ)」とは、「マ

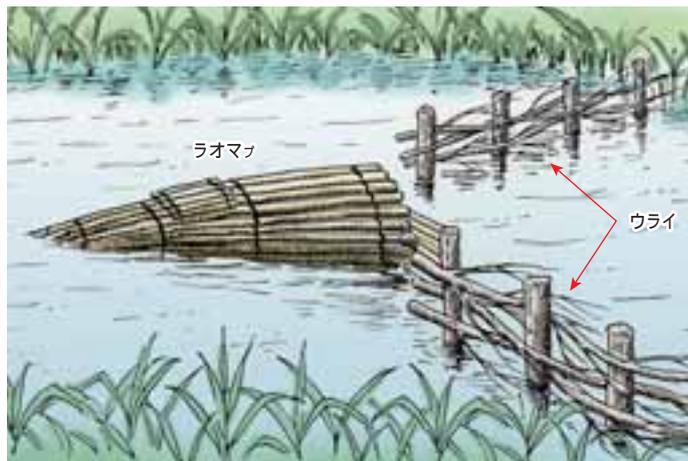
魚をとるためのしかけ 「ウライ」

「ウライ」は川はばのせまい小川に、V字形に何本かのクイをうち、これにヤナギの枝などをからませたものです。「V」の先に、魚が入ったらにげられない「ラオマフ(どう)」をしかけておいて魚をとります。

魚がのぼる時・下る時に合わせて「V」の向きを変えました。



現在、人工ふ化(p236)のために猿別川でサケをつかまえるしかけも「ウライ」と呼ばれる。ただし、かなりの大きさで、V字形ではない。



ウライと、その一番おくにしかけられたラオマフ。(参考:『北海道の自然と暮らし』)



テシによる漁。タモ網ですくい取っている。

(平澤屏山『蝦夷人川魚を捕る図』 函館市中央図書館蔵)

魚をとるためのしかけ 「テシ」

「テシ」は、川はばの方向にまっすぐ何本もくいを立て、そこにヤナギの枝を編んだものをはりつけたしかけです。テシで行き場を失った魚を、網やマレク、あるいは魚がふれると網が自動的に持ち上がって魚をとるしかけなどで、とりました。

また、2そうの丸木舟(チフ)の間にふくろ状の網を張り、上流から魚を追いこんでつかまえる「ヤス」漁も行われました。

「シシャモ」は「スサム」から ... 川魚のアイヌ語名

川魚のアイヌ語名を紹介します。

- ・サケ：カムイチェフ
- ・イトウ：チライ
- ・サクラマス：イチャニウ
ヤママ：イコイチャンコロチェフボ
- ・ヒメマス：カパツェフ
- ・オショロコマ：チポロケソ
- ・ウグイ：オツワッキ
産卵期のウグイ(アカハラ)：スブン
- ・ハナカジカ：パケポロ
- ・ドジョウ：チチラカン
- ・フナ：ランパラ
- ・シシャモ：スサム(スス・ハム[ヤナギの葉]から)
- ・ヤツメウナギ：ウクリベ

「シシャモ」という名前は、「スサム」というアイヌ語名からきています。また「オショロコマ」は、別の地方でのアイヌ語名「オソルコマ」からできた名前です。

ヒメマスのことを、北海道で「チップ」ということがあります。これはアイヌ語の「チェフ=魚」を聞きちがえたものです。チップ(チフ)では舟のことになってしまいます。

ここにあげた魚は、ほとんどが食用とされましたが、ヤツメウナギはちがいます。

ヤツメウナギは干して軒先につるし、病気を寄せつけないための「おまじない」として使いました。

レク」の別の地方での呼び名。

マレクでサケをとろう ... 上士幌町東泉園での体験

上士幌町の「東泉園」では、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちが（アイヌも和人も力を合わせて）十勝のアイヌ文化を伝えていく場所づくりをしています。

秋には、生きたサケ（カムイチェブ）を東泉園の池に放して、だれでもマレク漁を体験することができる「マレク（マレク）漁の集い」が開かれます（北海道ウタリ協会上士幌支部）。

池の中ではあっても、泳ぐサケをつくことはかんたんではありません。「来た!」と思ってついても、サケはすでに泳ぎ去っていたり、身をかわしたりしています。息を整え、集中力を高め、サケの動きを読み、正確にマレクをつき出さなければなりません。

人によっては何度も何度もチャレンジしなければとれないこともあります。それだけに、とれた時には大きな喜びが得られます。

マレクにかかったサケを持ち上げる時、サケの「命の重み」をきくと感じられることでしょう。



「マレク漁の集い」。丸木舟(チブ)に乗って、池に放されたサケをマレクでつこうとする子どもたち。(上士幌町・東泉園)



東泉園の位置。上士幌町字上音更。



カギにささったサケは、マレクにぶら下がり、重みではずれない。(上士幌町・東泉園)

マレク ... 体験のポイント



「かえし」のあるカギ。
(幕別町蝦夷文化考古館: 1)



「かえし」のないカギ。
(帯広百年記念館: 2)



「マレク漁の集い」でおこなわれるカムイノミ。(上士幌町・東泉園)

カギには「かえし」がなくてもよい

ふつう、釣り針には「かえし」といって、ささったあと、ぬけないようなくみがありますが、マレクのカギには、かえしがなくともいいのです。(ただし、十勝のマレクのカギにはかえしがあるものも見られます)

サケにささった時、カギがはずれてひもでぶらさがります。持ち上げる時、このカギがうまく上向きになるため、サケの重みではずれないのです。

かえしがなければサケを取りはずしやすいので、すぐ、次のサケをねらうことができます。

カムイへの祈りから

伝統的なアイヌ文化では、その年のサケ漁を始める時に、「アシリ・チェブ・ノミ（新しいサケをむかえる神への祈り）」をします。東泉園でも、マレク漁を始める前に、祈りの儀式（カムイノミ）がおこなわれます。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

1 幕別町蝦夷文化考古館（まくべつちようえぞぶんかこうこかん）：幕別町字千住 114 - 1 電話：0155 - 56 - 4899 火曜日休館（p150）

2 帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155 - 24 - 5352 月曜日休館

魚以外の食べものをとる ... 植物、そして動物

アイヌ文化では、魚以外にもさまざまな自然のめぐみを得ています。その一部を紹介します。

食べていた植物

野草の中で、今でも山菜として人気の高いギョウジャニンニクは「ブクサ」と呼ばれ、とても大切な食べ物でした。

あるいは、オオウバユリは「トゥレブ」と呼ばれ、その鱗茎（球根のようなもの）からでんぷんをとり、また、保存食として「トゥレブアカム」を作りました。



オオウバユリ(トゥレブ)の花と、その鱗茎のせんいで作られた保存食「トゥレブアカム(帯広百年記念館: 2)」。

また、コウライテンナンショウ（ラウラウ）の地下茎には毒があるのですが、ある時期になるとその毒が一部に集まるのでその部分だけを取り除き、残りを食用としたといいます。

秋や春先には、ヤブマメ（エハ）の地下にできる豆をほり集めました。

沼では秋に、水面にうかぶ水草のヒシ（ペカンベ）の実をとりました。



ヒシ(ペカンベ)の実を沼で集める。円内がヒシの実(右は皮をむいたもの)。

伝統的な狩り

シカ（ユク）は大きく、とくに冬には群れで行動するのでとても大切なえものでした。

動物は食べ物としてだけでなく、その皮、角、骨を道具などの材料として利用できます。

さらに、毛皮や角は和人と交易商品としても重要なもので、これによって木綿の布や鉄器、うるしぬりの器など、アイヌ文化にとって大きな意味をもつ本州の産物を手に入れることができました。

狩りは弓矢やヤリ、あるいはさまざまなワナやしかけによっておこなわれていました。

弓矢による狩りでは、トリカブト（スルク）という草の根の毒をヤジリ（矢の先）にぬっていました。この毒は何種類かあるトリカブトをどのように混ぜ、ほかに何を入れるのかによってききめがちがい、他人には知られないようにしていたといいます。



冬の狩り。(写真:木下清蔵写真資料より 財団法人 アイヌ民族博物館蔵) 円内はトリカブト(スルク)の花。根から毒をとる。

狩りは一人でやる場合もありましたが、何人がチームを組み、指示する人、追いこむ人、しとめる人、と役割を分担しておこなう場合もありました。

ワナには、ひもに動物がさわるとトメがはずれて矢が発射される「アマツポ」というしかけ弓があります。

そのほか、エサをとろうとすると重しが落ちるしかけ、エサをとるためにジャンプすると首が引かかるような木の又を利用したしかけ、通り道に輪を作っておいて走りぬけようとした動物をとるしかけなどがありました。



復元された、しかけ弓「アマツポ」。(上士幌町・東泉園)